

「んおっまってっ♡ごめんっ♡♡騙して悪かったからあッ♡♡そんなんっ♡そんなの…
ぜったい挿入れないでっ……………♡♡ね♡ねっ……………♡♡♡♡」

「だめ。許さない。愛斗は子宮で俺の愛受け止めてくれるでしょ？ねえ。ねえ？いくよ？ハ
メるよ？」

ありえないほどデカイ、血管浮き立つちんぽにくらっとして。
窓の外のネオン街の喧騒も、遠のいていく…。

LAMB(ラム)。

群雄割拠の歌舞伎町で、鮮やかな快進撃を放つ大手ホストクラブ。

そのクラブの中でもひとときわ目を引くナンバーワンホスト、それが俺、月見愛（つきみラブ）。

Youtube、TikTok…様々なメディア露出で時折バズったり、炎上したり…。

色んな意味で並みのホストより知名度もあるけど…バリバリ、店舗で数字も取ってる！

マルチタスクな超絶売れっ子ホスト、それが俺！

ホワイトブリーチの髪をゆるく王子様風にワックスかけて、唇にはほんのすこしグロスを。肌は女好きする色白キープ。

パーソナルジムで適度に絞った体軀は、女がメロつく細身マッチョ！

天才的ビジュのナンバーワンホスト。

…そんな俺の日常は、シャンパンの嘘の味で塗り固められている。

「今宵も姫からの寵愛いただきました。俺がトップ走ってLAMB…いや、歌舞伎町全体照らして、盛り上げていきたいと思えますヨイチョー♡」

自慢の顔を傾けて、甘い囁きを投げかけた。

すると彼は頬を赤く染め目元を覆う。

……ああ、なんて余裕……♡

俺はたまらず前かがみになる。

俺のビジネス術は。

一人の太客を使い捨てすること！

金目を感じるビジュアルの姫を見つけたら、甘く優しく誘う。

小さなお願いことから始めて、たくさん依存させて、恋人、友だち、家族、俺以外の全てを切らせて。

選択肢がなくなつたところまで来たら、あとは絞り尽くして、ポイ。

後腐れ悪いと困るし。ビジネスライクがいーんだよ♡

俺様に惚れちゃったのが悪い♡

コールボーイたちの喝采の拍手を受け取って、シャンパンタワーに恍惚としていると。

姫……にしてはデカイ、隣の「男」が俺にオドオドとはにかんだ。

「愛くん、が…幸せなら…俺…何だつて君にあげるから…。大好き愛くん…おめでとう。よいしょ…♡」

感極まったのかやや鼻声の、しかししつとりとした低音がマイクを響かせた。

男の名は、九条周（くじょうあまね）。

かなりデカイ巨軀。でも猫背で圧がない。

顔の半分を覆う長い前髪。

パテックフィリットの腕時計、艶やかなベルエッティの最高級革靴…腕元と足元だけで一千万を軽く超える超一級の資産価値。

金目ヨシ、大当たりの謎の成金。

かつちり仕立てのいいスリーピースつてのに、着られてない良い体格。

腕や首など覗く肉体は雄らしい。

そこだけ見りゃ、姫じゃなくてホスト…いやヤクザとか？

ホストクラブの華やかで騒がしい空気の需要とは、およそ対極にある男…。

これが最近ついた俺指名の姫である。

とにかく、こいつが使う金は桁違いだった！

「愛くんの腫って…俺が何をしても許してくれるみたいで…ホッとするんだ…。だから、お礼の気持ちで…シャンパンいれるから…」

「愛くん、いつも俺みたいなの…話聞いてくれて…あ、ありがとう…。これはつまらないものだけど…」

「これ、ほんの気持ちだから…別に…そういう下心とかじゃないから…。」

「愛くんを一番にして、俺は君を幸せにしてあげたい…。俺が愛くんに幸せにしてもらったように…返してあげたくて。」

エンジェル、アルマンド、タワー、タワー！

初回でコロツと本指になった奴は、決まって締め日に現れ、莫大な金を湯水のように注ぐ

ようになった。

同性だから色恋営業もなし！超・超・純良の太客じゃん！

それで俺はあっさり、全ての細客を切るようになった。

こんな金、どこから出てくるかよくわかんないし、一切素性を話してくんないけど…。俺は俺のことにしかキョーミないし。楽しんで稼げるならどうでもいいや。ハハハ♡

「周？今日も来てくれてたんだ…ずっと待ってたよ？」

俺は今日も、一番高い席で退屈そうにグラスを揺らす九条に、いつものように甘い蜜を垂らす。

それから数ヶ月が経ち、俺の売り上げは天井知らずの独走状態。

だから、完全に調子に乗りまくっていた。

ある日の営業で高級ブランドをがぶ飲みして泥酔した俺は、九条の広い肩に顔を乗せて、とんでもない提案を口走ってしまった。

「ねえ周、今度さあ、お家デートしよ…？俺が周の家に行ってやるからさあ、そんでさあ、イイこと…しよ？ね？だからさーもつと、入れてくれない？俺からの特大のサービス…欲しいよね？」

九条はそのとき、長い前髪の奥の目を丸くして、驚いたように何度も瞬きをしていた。どこか不気味なほど静かに、汗ばんだ両手で手を握りしめられて、なんか口走りながら、全力で頷きたおす周を覚えている。

…そして約束の当日を迎えてしまった。

なんつーことを吐いちゃったんだ俺！

完ッ全に、やらかった！

あの悪酔いした晩、脳裏に焼きついている、前髪の間から覗いた周の真剣な目つきを思い出して、ものすごく億劫になる。

ここで周に切られたら俺、ナンバーワン伝説も終わっちゃいかねない。

だから無下にブッチはできないし、行くっきゃない…。

…ま、男同士だし。

周は見るから気が弱そーだし。

流石に冗談で押し通せるよね？♡

指定された住所に向かうと、そこは都内の一等地にある、目も眩むような超高級タワーマンションの最上階。

出迎えてくれた九条は、いつも店で見せるスーツ姿ではなく、上質なシルクのルームウェアを纏っていた。

部屋の中は、およそ一般人とはかけ離れた富豪の生活そのもの。

歳も近そうだから、俺みたいに体面だけの成金だと思ってたけど、面食らった。

超・カ・ネ・モ・チじゃん！！♡

「愛くん、いらっしやい。口に合うか分からないけれど、これ、食べて…」

用意されていたのは、お抱えのシェフでも呼んだのかと思うほど豪華な手料理の数々。

あまりの居心地の良さと極上のホスピタリティに、愛斗は自分が営業中であることすら完全に忘れてしまっていた。

広いリビングの特大ふかふかソファーに寝そべり、大画面のシアターで映画を見ながら、俺はされるがままに我が儘放題の限りを尽くす。

「周、喉乾いた。ワイン開けて？」

「美味しいやつだから、今注ぐね」

「周？これってシアター？」

「ああ、うん。愛なら好きなだけ使っていいよね」

「お腹空いたなー？」

「わ、わかった。今何か作って持っていくね」

九条は大きな身体を小さく丸めるようにして、俺の我が儘を全て受け止めてくれる。

髪の間から覗く横顔はいつもの照明より良く見えて、店で見せるオドオドした雰囲気とは少し違って見えたが…。

俺はすっかり気が緩んでいた。

映画の終盤、部屋の明かりが落とされ、静寂がリビングを包み込む。

九条が、大きな身体をごそそと動かして俺の隣にすり寄ってきた。